

2023年3月26日 受難節第5主日礼拝

メッセージ「120万円の命」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 26章14-16節

「レント」と呼ばれる「受難節」も第5主日を迎えました。今回、共にお読みしたのは、キリストの最後の1週間の4日目、水曜日の出来事といわれています。「<sup>しゅろ</sup>棕櫚の主日」(来週にあたります)に、子ろばに乗ってエルサレムに迎えられたキリストは、翌日エルサレム神殿から商人を追い出します。その翌日の火曜日には、神殿で祭司長たちやパリサイ派、サドカイ派の人々と議論を戦わせた後、オリーブ山に登り、弟子たち対して多くのたとえや苦難の予告を語られました。そしてその翌日の水曜日、イエス・キリストはエルサレムへは行かずに、近くのベタニアという村で一日を過ごされたことになっています。この日のイエスにまつわる記事は、ナルドの香油を一人の女性に注がれるという記事だけです。

この、いわゆる「ナルドの香油」の記事は、今日の箇所直前に書かれています。イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモン家で食事の席についておられた時、一人の女が、純粹で極めて高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って近寄り、イエスの頭に香油を注ぎかけた。すると、弟子たちがそれを見て「なぜこんなに香油を無駄遣いするのか。これを300デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すこともできたのに」と憤慨したので、イエスが「なぜこの人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」と語られた、という話です。300デナリオンという生々しい金額はこのマタイ福音書では触れられておらず、マルコやヨハネ福音書において言及されているのですが、まあ金額はともかく、死の運命が近づいているイエスにとって、この女性による心からの、精一杯のもてなしを受けたベタニアでの1日は、本当に心休まる、いやされる休息の日となったことでしょう。私たちが心からくつろげる場所・いやされる場所・心を温めることのできる場所というのは、ただ静かで、自分にとっての敵がないというだけでなく、自分のことを心より敬い、受け入れ、愛してくれる人々がそこにいてくれるということが必要なのかもしれません。私たちが今つくっている共同体はどのようなものでしょうか。私たちの家庭や、職場や、その他のグループは、果たしてそのように、私たちが心からくつろげる場所・いやされる場所・心を温めることのできる場所となっていますか。病気に苦しむ人がいたり、悩みや不安に押しつぶされそうな人がいたり、死を間近に感じるようになってきた人がいたり、そのようにみんなが何らかの痛みを抱えていて、でもそれぞれが互いにいたわりあい受け入れ合い

愛し合って、温かい場を自然に作り上げているような場となっているでしょうか。「なぜこんな無駄なことをするのか」と誰かのことを非難したり、自分を正当化したりすることで、ただでさえ心痛むものを抱えている相手がさらに縮こまって「ああここにも私の居場所はない」と思わせないような、まさに詩篇23篇で言うところの「憩いの<sup>みぎわ</sup>汀」のような場を、私たちはこの世界に沢山つくり上げていきたいものだと思います。そして、そのような場の一つに教会がなってゆけばと願っています。

さて、そのようにイエスにとってのいやしの日と言えるものであった水曜日、一方ではイエスを付け狙う動きが具体的に始まった日でもありました。その陰謀は、もとよりイエスの存在を邪魔なものと苦々しく思っていた祭司長たち・律法学者・ファリサイ派の人々など、ユダヤ教の宗教的指導者たちによって企てられておったわけですが、その陰謀に自ら加担しそれを加速させたのが、イエスの12人の弟子たちの一人であったイスカリオテのユダであったというわけです。このイスカリオテのユダは、イエスを裏切って祭司長たちに売り渡し、自分が意図していなかったにせよ結果的にイエスを十字架へ追いやり死に至らしめるきっかけをつくった人物であります。このユダさえ裏切らなければ、イエスは多くの苦しみを受けられ十字架で惨めな死を強いられることはなかったかもしれない。ユダはそのせいで、聖書の中で最も有名な罪人の内の一人に数えられるようになってしまいました。このユダが、2000年の長きにわたって世界中の反ユダヤ主義を形成するのに多大な貢献をしてしまった面もあるわけです。ドイツでは今日においても、子どもにユダと名付けると、役所で受理してもらえないのだそうです。法律的に禁じられているわけではないようですが、ドイツにおいて「ユダ」という名前は、倫理的な観点から「悪魔」と同様にふさわしくない、認められない名前であるというわけです。今では日本でも、なかなか個性的な名前が増えてきておりまして、いわゆる「キラキラネーム」などとも呼ばれておりますけれども、それよりももっと以前の日本で、子どもに「悪魔」と名づけようとした親がいて、その名前は倫理的にふさわしくないのではないかと大きな問題となったことを思い出します。

ただキリストを裏切ったという点では、ユダだけではなく、ペトロをはじめとする他の弟子たちも同罪ですし、それに、ユダが裏切ったからこそ、イエスは十字架につけられ、結果的に人間の罪からの救いの計画が成就したわけです。高名な神学者であるカール・バルトをはじめ、イギリスの「デイリー・メール」という新聞においても、あるカトリック関係者が「最高の罪人とされるユダだが、彼は神の業を行ったのであり、聖人でさえあり得る」と語っています。つまり、ユダの裏切りも神の計画の一部であり、ユダはその成就のために働いたに過ぎないというわけです。

しかしいずれにせよ、イスカリオテのユダがイエス・キリストを裏切って金で売り

渡したことは聖書の伝える事実です。ヨハネ福音書においては、ユダにサタンが入ったと書かれています。神と対極にある存在であるサタンが、イエスが多くの弟子たちの中から厳選した12使徒の内の一人に入り込んだのです。ですから、悪魔は聖徒であろうと一般人であろうと罪人であろうとかまわず、私たちをその支配下に置くべく、いつも隙をうかがっているのだということ、私たちが一生懸命信仰を守ってしようが、四六時中キリストのことを考えて祈ってしようが、罪は私たちの気付かないうちに入り込むのだということを私たちは心に刻んで、つねに自分の信仰の姿を顧みるようにしなければと思っています。

10年ほど前、朝日新聞において「命の値段に格差」という見出しで、アメリカのテロ犠牲者への補償額と誤爆死したアフガン人への補償額を比較した特集をしていました。それによれば、米のテロ犠牲者の補償額の平均は、破格の2億4000万円で、人が一生暮らしてもお釣りがくる額です。一方、アメリカは、深夜に米軍による誤爆で殺された犠牲者の遺族にいくら支払ったかという、たった13万円だったそうです。13万円は彼らアフガニスタン人の半年の生活費に匹敵するそうですが、方や2億4000万円と方や13万円。しかも13万円の補償金を支払われたのは、犠牲者全員ではなく、親米の立場を取っていた犠牲者だけだったと。その他の4000人とも、一万人ともいわれるアフガンの空爆犠牲者に対する補償はいっさいなかったとのこと。そのような「命の価値」は戸籍によってはかられることもあります。中国の重慶で起きたある交通事故で3名の少女が命を失ったのですが、農村戸籍の少女への賠償額は5.8万元(110万円)だったのにもかかわらず、都市戸籍の同級生は20万元(380万円)の賠償金が支払われたといいます。農村戸籍の少女の父親は、「同じ命ではないか、同じ学生ではないか、なぜ農村の子供の命は軽くみられるのだ。」と嘆いていたといいます。そしてそのような命の価値に対する格差づけは、アフガニスタンや中国だけでなく、私たちの日本でも起こっていることでもあることを思います。例えば、日本における事件・事故の犠牲者の平均補償額は660万円で、しかも男性と女性とで、支払われる賠償金なども、現実的に大きな差があり、子どもや障害者であれば、その差はもっと広がるのだそうです。それは私たちが死亡していなかった場合に将来得られたはずの収入がどれくらい見込めるかという点ではかられてしまうために、そのような格差ができてしまうんだということらしいです。4年ほど前に、大阪市生野区、うちの近所ですけど、そこで聴覚障害のある小学生が下校中に重機に巻き込まれて亡くなった事故がありましたが、その事件でも、亡くなった子が聴覚障害を持っていたから、賠償額は女性の労働者の40%にとどまるはずだという被告側の主張でありました。同じ命なのに、その値段に格差が付けられてしまう現実があるということ

を私たちはどう考えていけばよいのでしょうか。

サタンの侵入によってユダがイエスを裏切って得ることになった対価は、銀貨30枚でした。この銀貨はシェケル銀貨と呼ばれるものであったと考えられており、1シェケルは、当時の相場で4デナリオンに当たる金額だったそうです。1デナリオンが一日の賃金に相当する額であったといわれていますから、1シェケルは4日分の賃金に相当するわけです。ですから銀貨30枚、30シェケルとなると、 $30 \times 4$ で120デナリオンとなります。1日の賃金を分かりやすく例えば1万円とすると、銀貨30枚は120万円となります。大きい金額のようにも思えますが、考えてみると、一人の命がたった4か月分の賃金分ではないわけです。ユダはたったそれだけの金のためにキリストを裏切ってしまった。ベタニアで香油を注いだ女性、彼女の香油の値段は300デナリオンであったといえます。彼女は1年分の賃金に相当する香油を惜しみなくイエスの頭に注いだというのに、ユダはその3分の1にしかならない120デナリオンの楽でイエスの命を奪うことになってしまった。私たちはそのことをどういうふうにか考えるのか。最近話題になっている闇バイトで、強盗に入って金品を強奪するという「仕事」があるそうですが、それが世間に公になったきっかけとなった、狛江市の強盗殺人事件の報酬が約100万円だったそうです。私たちは目に見える目先の利益に惑わされて本当に大きな大事なものを失ってしまうことがあるということを時々忘れてしまっている時があるのではないか、今日のこの箇所からは、そのような問いが私たち自身に対して投げかけられているようにも感じます。

もちろんユダも、単に金が欲しくてキリストを売ったわけではなかったでしょう。ユダなりの理想のキリスト像があって、その理想像と乖離しているキリストにはっぱをかけたかったのかもしれない。少し追い込まれればメシアも本気を出すかもしれない、などと考えていたのかもしれない。しかしそんなユダには、きっとキリストの本当の姿が見えていなかったのです。「目に見えるものではなく、目に見えないものを見ていく」とはイエス・キリストも言っておられましたし、パウロも言っています。目に見えるものばかりに心躍らされて一喜一憂するのではなくて、神の計画やキリストの思いなど、目に見えないものにこそ目を向けて、これからを歩いていけたらと思っています。私たちが日々犯してしまっている多くの些細な罪、あるいは愛というものも、それ自体は目には見えないものですから、私たちは軽く考えてしまいがちですけれども、しかしそれもお金や表面的なふるまいなどでどうこうできるようなものではない、本当に重くて大きなものなのだということを感じていけるような、そのような感性を磨きつつ、残り少ないレントの期間を歩いてゆける私たちになりたいと思います。